

現代の大学生の日常的生活感情 - 幸福感，及び不幸感を中心に -

堤 雅雄*

Masao TSUTSUMI

Daily mood and emotion of modern university students:
What is happiness, and what is unhappiness for them?

[キーワード：日常感情，幸福感，不幸感，青年期]

[Key Words: daily mood,emotion,happiness,unhappiness,well being,adolescence.]

序

現代日本の若者たちは，歴史的に見ても世界的に見ても，戦争や死という究極の不幸から最も遠い処にいるという意味で，類いまれな平穩の中に生きているように見える。しかしこの平穩さは逆に彼らの実存的不安の源泉ともなりうる。特に大学生という時期は，社会的に承認されたモラトリアムの中で，高校生以前の与えられた生き方から解放され，改めて主体的な自己を模索する自由と，それと同時に突き放された寂寥感の中で戸惑っている感さえ見られる。人生で最も多彩で起伏に富んだ時期にあたり，一体彼らは日常どのような感情状態にあり，何に幸せを，何に不幸を感じているのか。

青年期の生活全般にわたる感情経験については，すでに幾つかの議論がある。例えば五味（1988）は，現象学的見地から青年期特有の生活感情や気分について論じる中で，この領域に対する実証主義的心理学研究の本質的困難性と限界とを指摘している。筆者もこの困難性については重々痛感しているところではあるが，それが故にこそ基礎的知見を得るための実証的アプローチの必要性は否定できない。

そのような研究例としては落合（1985）のものがある。彼は，青年期における様々な生活感情間の相互関連について，クラスター分析の手法で解明を図り，大きく2つの感情群を見出している。1つは充実感，感動，幸福感，よろこび，解放感，期待感の6つからなる肯定的感情群，

いま1つは孤独感，自己嫌悪感，劣等感，空虚感や，あせり，無気力感，倦怠感など15種からなる否定的感情群である。さらに，彼の主たる関心の対象である孤独感を中心に，15の否定的感情群の因子分析を行ない，そこに親和と達成を両極とする「志向性の次元」と，対自と対他を両極とする「関係性の次元」を見出している。

これらの研究においてもそうだが，これまでの心理学的研究は何故か肯定的感情より否定的感情に重きをおくものが多い。その理由として考えられるのは，1つは青年期という時期自体が発達的に否定的な感情体験を基調としていると考えられること，もう1つは心理学者がもともと臨床的な問題，例えば抑うつとか不安等に対する関心がより高いためということが考えられる。

本研究では様々な生活感情を，肯定的感情の代表である幸福感と，否定的感情の代表である不幸感の2つに焦点化し，それぞれ「しあわせ」，「ふしあわせ」という日常語を通して分析することを主たる目的とする。果たして幸福感は不幸の不在を，不幸感は幸福の不在を意味する（Andrews & Withey, 1978）といった単純で浅いレベルの体験なのか，それともそれ以上の何か，例えばRyff（1989）のというような人生の目的とか人間的成長に関わるような実存的意味合いを帯びた体験なのか。

ひとは何に幸せを感じるのか，幸せとは一体何なのかといった基礎的研究は意外に少ない。その中でLu & Shin（1997）は，54人の台湾の被験者に対する半構造化された面接調査で「幸せ（happiness）とは何か」，「ど

*島根大学教育学部心理学研究室

んなことで幸せ (happy) になるか」を問い、その結果を次の9つのカテゴリーに分類している：1) 尊敬されることの満足感、2) 人間関係の調和、3) 物質的欲求の充足、4) 仕事上の達成感、5) 生活の安寧、6) 他者よりの優越の快、7) 自己統制感と自己実現、8) 快と肯定的感情、9) 健康。この結果は幸福感をかなり包括的に捉えていると同時に、今だ儒教的精神が色濃く残っている台湾の文化、例えば「家の誉れ」や社会的評価を重んじる価値観が反映されていることを特徴としている。

本研究ではこれらの知見を参考に、与えられた旧来の価値観には投じえず、かといって自分なりの生き方を見出すことも困難な状況にあると思われる現代日本の平均的大学生の生活感情とは何か、彼らの日常言語を通して迫ってみたいと思う。

予備調査 1, 日常感情の表現用語

まず、現代の大学生が日常経験する気分や感情をいかなる言葉を通して表現しているのかを知るために、次のような調査を行なった。

被験者：地方国立大学教育学部の人格心理学受講生、64名。性別、年齢不問。

調査時期：1998年7月。

質問紙：次の2問に対する自由記述を求める。1)「自分の気分や感情を表わす言葉としてよく思い浮かべるものを挙げてください。」2)「その言葉はどのような意味やニュアンスで使っていますか、説明してください。」

結果と考察：現代の大学生が、日常生活で実際に使うことの多い生の言葉を、肯定的感情語、否定的感情語及び中立的感情語に分類し、その出現頻度とともに表1に示す。出現頻度に関しては、肯定的感情表現が延べ122であるのに対し、否定的感情表現は延べ262と2倍以上となっている。ただし、ここで否定的感情語に含めた「サイアク」は、より正確に言えば、否定的状況で用いられるものではあっても、必ずしも否定的感情状態の表現とは言えぬことが、その説明の記述から窺われた。

また、肯定的な語彙の多くが「嬉しい」、「楽しい」といった旧来の世代からのものであるのに対し、否定的なそれの殆んどが「ムカツク」、「だるい」等、最近の若者特有の流行語、即ち彼らにとっての「自分達の言葉」であるのは興味深い。否定的感情語の語彙の多様さと新しさは、それらの感情状態自体の曖昧さと多様さだけでなく、他者に自分達のつらさを解ってもらいたいという欲求の強さの表れであろう。これらの結果に、彼らの日常の実感における否定的気分の質、量両面にわたる相対的優位性が示唆されている。

表1 大学生の日常生活感情を表現するためによく使われる言葉 (予備調査1、被験者、64名)

| | 頻度(人) | 説 明 |
|-----------------|-------|---------------|
| < 肯定的感情語 > | | |
| 嬉しい・すっごい嬉しい | 39 | |
| おいしい | 16 | 何気なくやったことが面白い |
| いいカンジ | 12 | |
| まいどー | 11 | 気分よいあいさつ |
| 楽しい | 10 | |
| しあわせ | 8 | |
| きた! | 8 | 期待してたことが叶った |
| かわいい | 4 | |
| ラッキー | 4 | |
| その他 | 10 | |
| < 否定的感情語 > | | |
| だるい・しんどい・疲れた | 48 | わずらわしい |
| さむい・さびい | 28 | |
| ブルー・超ブルー | 24 | |
| うざー・超うざー・めんどくさい | 21 | かったるく、無気力 |
| ムカツク、超(ゲロ)ムカツク | 20 | 嫌だ・勘弁して・気分最悪等 |
| キレた・キレそう | 20 | |
| つかえん | 20 | 利用価値がない |
| へこむ | 17 | 人からガツンとされたとき |
| いけてない | 13 | 良くないとき |
| おちたー・ハイおちた | 10 | 気分が落ちた |
| イラツク・イラッチキタ | 7 | |
| せつない | 7 | |
| その他 | 27 | |
| < 中立的感情語 > | | |
| やられたー | 26 | 予想しないことをされた |
| やばめー | 16 | |

予備調査 2 : 大学生の体験している幸福感と不幸感に関する質問紙調査

被験者：地方国立大学教育学部、及び法文学部学生、102名。年齢及び性別は不問。いずれも青年心理学受講生。

調査時期：1998年10月

質問紙：質問項目は以下の4つである。

質問1、「しあわせ」ということばから連想することは何ですか。

質問2、あなたはどんなときに「しあわせ」を感じますか。

質問3、「ふしあわせ」ということばから連想することは何ですか。

質問4、あなたはどんなときに「ふしあわせ」を感じますか。

以上の4問について自由記述での回答を求めた。

表2 「しあわせ」及び「ふしあわせ」の主要な連想語
(予備調査2、被験者、102名)

| 「しあわせ」 | 頻度(人) | 「ふしあわせ」 | 頻度(人) |
|------------|-------|---------|-------|
| 家庭・団欒 | 45 | 孤独 | 22 |
| 恋・愛 | 39 | 暗い | 18 |
| あたたかい・ぬくもり | 35 | どん底・さむい | 11 |
| 食べ物 | 27 | | |

結果と考察：「しあわせ」、「ふしあわせ」それぞれの連想語（質問1, 3）を大まかなカテゴリーに分類し、その頻度を表2に示す。いずれも人間関係に関するものが上位を占め、感覚的表現がこれに次いでいる。

幸福感の経験に関する記述内容については、Lu & Shinn (1997) の提起する9カテゴリーのうちの「仕事上の達成感」を除く8カテゴリーに、新たに5カテゴリーを加えた計13のカテゴリーを前もって設定し、これに沿って分類した。また、不幸感に関しても、幸福感の対極の意味の13カテゴリーを作成し（表3）、同様に分類した。結果を表4に示す。今回の結果は前もって準備された多くのカテゴリー - ほどのヴァリエティは見られず、少数のカテゴリーに収まった。また、Maslow (1987) のいう至高体験に類するようなものも出現しなかった。総記述数は幸福感で114例、不幸感で57例、その多くが日常生活でのささやかな経験についての記述である。前述の感情表現語（表1）とは対照的に、否定的（不幸感）体験の記述が肯定的（幸福感）体験のそれより少なかったのは、体験そのものの少なさというよりは、具体的に記述することに対する心理的抵抗によるものとも考えられる。

本調査：主観的幸福感と不幸感の因子構造の分析

予備調査で得られた「しあわせ」体験、及び「ふしあわせ」体験の記述をもとに、主観的幸福感と主観的不幸感に関する質問紙を構成し、その因子構造を解明する。

方法

被験者：地方国立大学教育学部及び法文学部学生、いずれも進路指導論の講義の受講生、計159名。このうちデータの欠損があったものを除き、最終的な分析対象となったものは151名である。内訳は男子41名、女子110名。学年は1, 2回生14名、4, 5回生10名を除く127名が3回生である。また居住形態については、家族と同居が36名、一人暮らしが104名、その他が11名である。

調査実施時期：1999年1月

質問紙：予備調査における連想語や具体的体験の記述内容を参考にして、幸福感尺度、不幸感尺度各々38項目、計76の質問項目を作成した（項目内容については表5, 6参照）。それぞれの項目について、「あなたは以下の場面で、どのくらい「しあわせ」と感じますか?」、あるいは「あなたは以下の場面で、どのくらい「ふしあわせ」と感じますか?」と問い、「非常にそう感じる」から「全くそう感じない」までの5件法で評定を求めた。

結果と考察：2つの尺度毎に因子分析をし、その結果を表5, 6に示す。いずれも4因子解を採り、直交バリマックス回転をかけた後のものである。なお、この解での累積寄与率はそれぞれ37.7%, 41.8%とやや低めであるが、簡明さを優先した。

幸福感の第1因子は、その多くが自由や解放感、安らぎを表わす項目で、バイト料などの収入があった時、といった項目（H-17, H-25）もこれに含まれているが、ある種の安堵感を意味しているという意味で共通している

表3 幸福感・不幸感の分類カテゴリー

| 幸福感 | 不幸感 |
|-----------------|------------------------|
| 1 認められたことによる満足 | 1' 認められなかったことによる不満・喪失感 |
| 2 人間関係の円滑さ | 2' 人間関係の不和・喪失感 |
| 3 物質的充足・満足 | 3' 物質的困窮・不満足 |
| 4 生活・人生の安定 | 4' 生活・人生の不安定 |
| 5 他者に対する優越感 | 5' 他者に対する劣等感 |
| 6 他者との感情の共有 | 6' 他者との感情の離脱 |
| 7 自律と自己実現 | 7' 自己不一致 |
| 8 身体的快適さ | 8' 身体的不快感 |
| 9 精神的解放感 | 9' 精神的束縛感 |
| 10 環境の良さから受ける感動 | 10' 環境の悪さから受ける不快感 |
| 11 健康 | 11' 不健康 |
| 12 予期せぬ良い出来事 | 12' 予期せぬ悪い出来事 |
| 13 社会・世の中に対する満足 | 13' 社会・世の中に対する不満足 |

表4 「しあわせ」、「ふしあわせ」経験の記述内容の分類
(予備調査2、被験者102名)

| 「しあわせ」経験 | |
|---------------------------------|--|
| 1. 物質的充足・満足：31例 (27%) | |
| ・おいしいものを食べたとき：25例 | |
| ・バイト料が入ったとき：3例 | |
| 2. 人間関係の円滑さ 29例 (25%) | |
| ・一緒にいたい人と一緒にいたいときに一緒にいられるとき：17例 | |
| ・人に囲まれて過ごしているとき：3例 | |
| ・恋人と一緒にいるとき：3例 | |
| 3. 環境の良さから感じる感動：14例 (12%) | |
| ・天気が良いとき：3例 | |
| 4. 自律と自己実現：13例 (11%) | |
| ・目標が達成されたとき、近づいたとき：7例 | |
| ・何かに向かい努力している自分を実感したとき：3例 | |
| 5. 精神的解放感：12例 (11%) | |
| ・暇があるとき：4例 | |
| ・ボーっとしているとき：4例 | |
| 「ふしあわせ」経験 | |
| 1. 人間関係の不和：13例 (23%) | |
| ・遊ぶ人がいないとき：2例 | |
| ・他人に自分の存在がどうでもいいとき：1例 | |
| ・自分の考えが分かってもらえないとき：1例 | |
| 2. 自己不一致：10例 (18%) | |
| ・何もかも思い通りにならないとき：4例 | |
| ・何かに追われて、やりたいことができないとき：2例 | |
| ・自分が負けだと思ったとき：2例 | |
| 3. 物質的困窮・不満足：7例 (12%) | |

のであろう。そこでこの因子を「解放感・安堵感」因子と解釈する。

幸福感の第2因子は、自己の存在価値が他者に認められたという思いや、少なくとも自分自身で実感できたという意味の項目群で、これを「自己価値の確証感」因子と名付ける。

幸福感の第3因子は、自分を越えた社会全体の平安や幸福を意味するもので、これを「社会的幸福感」と名付ける。他人の喜びを自分のものとする発想は、教師を指す学生達だからこそかもしれない。

幸福感の第4因子は快適さや心身の健康性の実感を表わす項目から成る。従って、これを「健康感」因子と名付ける。

不幸感に関しては、これら幸福感と対応する対照的な4因子が抽出された。第1因子は身体的不快感や欲求阻止感を中心としたものであり、「不快感」因子と名付ける。

不幸感の第2因子は、自己の存在価値が他者に否定された経験を中心としたもので、「自己価値の否定感」因子と名付ける。

第3因子は、他者との乖離や自己内部の理想と現実のずれの感覚からなるもので、「对人的乖離感」因子と名付ける。

不幸感の第4因子は、世の中の様々な不幸に対する憤りや悲しみに関するものが中心で、「社会的幸福感」と名付ける。

評定平均値で見れば、幸福感では38項目中27で4.0を超え、3.0未満は1項目(H9)にすぎない。ほとんどの項目について多くの学生が幸せと感じていることになる。特にH3(目標や夢が叶った時)は4.81と極めて高く、H19(大好きな音楽や映画等を楽しんでいる時)も4.38で、かつ各因子負荷量も全ての因子で低く、したがって尺度からは除外すべきものとみなした。またH8(将来の就職先が保証されている時)とH15(自由を感じる時)も同様の理由で削除した。

不幸感尺度では、評定平均値4.0以上は6項目で、逆に3.0未満が10項目と、全体に幸福感に比べかなり低めである。特にU4とU17は1点台で、かつ各因子負荷量も低く、尺度構成上からは除くべきだと考えた。

全体的考察

現代の若者を代表する平均的大学生が、日常生活で一体何を感じているのか、何に心を動かされているのかをみるために、「しあわせ」、「ふしあわせ」という日常言語を媒介に、基礎的調査を行なった。結果は、彼らの一見捉えどころのない風貌と同様に、ささやかでかつ多様な精神生活の様態を映し出した。強烈で感動的な体験はやはり少数の個人に限られたものであり、そのような私的体験を探るには、一般的に問う質問紙形式では限界があり、事例研究等の別の方法に委ねるべきであろう。

評定値で見ると、幸福感に関しては、用意した殆どの項目に対し被験者は高い反応を示した。一方、不幸感に関しては被験者の反応が分かれた。つまり、幸福感については個人を超えた一般性と同時に平凡性が、不幸感に関しては夫々の個人の個性性と多様性が現れたと解される。これは連想語における反応とも共通する。

そして幸福や不幸が、自分自身の個体内的快経験だけでなく、個体間の関係性の実感を通して現れることも今回の結果で確認できた。よくいわれるように、美味しいものを食べる喜びも、一人では半減する。皆で味わってこそのものである。

概念的な曖昧さ、即ち幸福感や不幸感が気分(mood)か情動(emotion)か、一時的か持続的か、認知的か感情的か等々、問題は残るが、それは今後の研究の発展に期待しよう。

表5 「幸福」感尺度の因子分析結果 (数値は因子負荷量)

| | 第1因子 | 第2因子 | 第3因子 | 第4因子 | 評定平均値(SD) |
|---------------------------------------------------|-------|-------|------|------|--------------|
| H-5 : レポートやテストから開放されたとき | .64 | | | | 4.45(0.76) |
| H-16 : 眠たいときに眠れ食べたいときに食べることができるとき | .63 | | | | 4.14(1.00) |
| H-17 : 宝くじなどの懸賞に当たったとき | .63 | | | | 4.47(0.79) |
| H-26 : 悩みがなく、日々のんびり過ごせるとき | .62 | | | | 4.08(0.93) |
| H-25 : パイト料が入ったとき | .59 | | | | 4.11(0.81) |
| H-31 : 何も考えずにのんびりしているとき | .59 | | | | 3.62(0.97) |
| H-21 : 課題提出のとき、あなたはその課題をやっていませんでしたが、その講義が休講になったとき | .52 | | | | 4.30(0.78) |
| H-15 : 自由を感じる時 | .50 | | | | 4.38(0.81) |
| H-38 : 欲しいものが手に入ったとき | .47 | | | | 4.29(0.72) |
| H-7 : おいしいものを食べているとき | .41 | | | | 4.61(0.63) |
| H-6 : 遠距離恋愛の彼(または彼女)と久しぶりに会えて、一緒にいるとき | .40 | | | | 4.48(0.81) |
| H-4 : 寒い朝、布団の中でまどろんでいるとき | .39 | | | | 4.15(1.12) |
| H-14 : 雪のちらつく日、露天風呂でのんびり身体を伸ばしているとき | .37 | | | | 4.30(0.93) |
| H-33 : ストレスを感じないとき | .34 | | | | 3.77(0.99) |
| H-36 : 難しい課題をみんなで行う際に、自分の存在が必要とされたとき | | .73 | | | 3.97(0.94) |
| H-23 : 周囲の人たちから、性格がよく信頼できる人だと認められたとき | | .71 | | | 4.26(0.86) |
| H-1 : 授業や課題で自分の考えが先生や周りの人に認められたとき | | .65 | | | 3.94(0.96) |
| H-27 : 自分は他者よりかわいいまたはカッコイイと感じるとき | | .63 | | | 3.15(1.02) |
| H-29 : 自分を十分に表現できる場所(または事を)見つけたとき | | .60 | | | 4.16(0.83) |
| H-11 : 他者が持っていないもの(パソコン、英検準1級など)を持っているとき | | .57 | | | 3.17(1.00) |
| H-34 : 会いたいと思っていた友人にばったり会ったとき | | .51 | | | 4.21(0.85) |
| H-9 : 周囲の人たちより高価なものを持っているとき | | .50 | | | 2.64(1.06) |
| H-13 : 目標に向かって、努力している自分を実感できるとき | | .46 | | | 4.06(0.94) |
| H-38 : 欲しいものが手に入ったとき | | .45 | | | 4.29(0.72) |
| H-24 : 友人とうまくいっているとき | | .42 | | | 4.41(0.77) |
| H-18 : 全ての人が豊かで活き活きと暮らせる世の中になったとき | | | .69 | | 4.45(0.75) |
| H-35 : 子どもたちが活き活きと生きられる世の中になったとき | | | .65 | | 4.15(0.86) |
| H-2 : 周囲の人がしあわせのとき | | | .62 | | 3.75(0.89) |
| H-12 : 親しい人がしあわせのとき | | | .61 | | 4.01(0.81) |
| H-22 : 地球上から戦争がなくなったとき | | | .50 | | 4.46(0.78) |
| H-20 : 病気や怪我がなく元気なとき | | | | .61 | 4.05(0.95) |
| H-33 : ストレスを感じないとき | | | | .63 | 3.77(0.99) |
| H-14 : 雪のちらつく日、露天風呂でのんびり身体を伸ばしているとき | | | | .43 | 4.30(0.93) |
| H-32 : 美しい自然とふれあい、感動したとき | | | | .46 | 4.27(0.83) |
| 固有値(二乗和) | 4.40 | 4.36 | 2.94 | 2.62 | |
| 寄与率(%) | 11.58 | 11.46 | 7.74 | 6.88 | |

表6 「不幸」感尺度の因子分析結果 (数値は因子負荷量)

| | 第1因子 | 第2因子 | 第3因子 | 第4因子 | 評定平均値(SD) |
|-----------------------------------------|-------|-------|------|------|--------------|
| U-8 : 寒いところで長時間立つとき | .63 | | | | 3.42(1.20) |
| U-29 : 欲しいものが手に入らないとき | .63 | | | | 3.34(1.02) |
| U-22 : やらなければならないことが山積みするとき | .62 | | | | 3.68(1.14) |
| U-21 : 徹夜明けで授業を受けているとき | .62 | | | | 2.88(1.10) |
| U-12 : 旅行に行こうと思っていた期間に集中講義が入ってしまったとき | .60 | | | | 4.07(1.03) |
| U-3 : 遊びたいのに、お金がないとき | .57 | | | | 2.96(1.08) |
| U-11 : 風邪をひいているとき | .55 | | | | 3.68(1.07) |
| U-36 : 寝ようとするのに目がさえて眠れないとき | .54 | | | | 2.99(1.27) |
| U-16 : 出された食事の大半が嫌いなものだったとき | .54 | | | | 3.17(1.24) |
| U-9 : 好きなことをする時間がないとき | .51 | | | | 3.90(0.97) |
| U-37 : 嫌いな人に偶然会ったとき | .49 | | | | 3.26(1.13) |
| U-30 : 生活費に不安を感じて過ごすとき | .48 | | | | 3.42(1.07) |
| U-5 : 周囲の人より高価なものを持っていないとき | .48 | | | | 1.93(0.87) |
| U-33 : 自分の思うようにならなかったとき | .47 | | | | 3.52(0.98) |
| U-23 : 夏街灯の下に虫が群がっている中を自転車で通り抜けたとき | .44 | | | | 2.95(1.31) |
| U-24 : ストレスがたまっているとき | .43 | | | | 3.77(1.05) |
| U-31 : ほとんどの人が持っているものを自分が持っていないとき | .43 | | | | 2.91(1.16) |
| U-27 : チーム行動の際にみんなに邪魔扱いにされたとき | | .81 | | | 4.09(0.97) |
| U-28 : 話し合いのとき呼んでもらえなかったとき | | .77 | | | 4.01(0.98) |
| U-1 : 人にけなされたとき | | .66 | | | 3.54(1.13) |
| U-32 : 親しい人が寂しそうとき | | .52 | | | 3.73(0.94) |
| U-33 : 自分の思うようにならなかったとき | | .50 | | | 3.52(0.98) |
| U-15 : 友人と口論したとき | | .48 | | | 3.48(1.11) |
| U-18 : 自分は、他者よりかわいくない(またはカッコ良くない)と感じるとき | | .47 | | | 2.95(1.13) |
| U-24 : ストレスがたまっているとき | | .43 | | | 3.77(1.05) |
| U-35 : 言いたいことが言えないとき | | .41 | | | 3.62(1.08) |
| U-2 : 大切な人が突然なくなったとき | | .38 | | | 4.61(0.87) |
| U-6 : 知りあいではない人が悲しそうとき | | | .62 | | 2.44(0.99) |
| U-20 : 理想の自分に今の自分が追いついていないとき | | | .60 | | 3.32(1.18) |
| U-19 : 他者を理解できないとき | | | .57 | | 3.13(1.12) |
| U-7 : やらなければならないことがあるのに手につかないとき | | | .49 | | 3.03(1.14) |
| U-15 : 友人と口論したとき | | | .42 | | 3.48(1.11) |
| U-32 : 親しい人が寂しそうとき | | | .40 | | 3.73(0.94) |
| U-38 : 犯罪が絶えない世の中になったとき | | | | .73 | 4.19(0.93) |
| U-13 : 戦争があり、殺し合いが繰り返される世の中になったとき | | | | .63 | 4.46(0.79) |
| U-26 : 子供たちが生き活きと生きられない世の中になったとき | | | | .56 | 3.99(0.96) |
| U-34 : 深夜、隣の住人が大騒ぎしているとき | | | | .48 | 3.37(1.22) |
| U-10 : 授業中、私語をする人がそばにいるとき | | | | .42 | 3.16(1.12) |
| 固有値 (二乗和) | 5.98 | 4.48 | 2.94 | 2.47 | |
| 寄与率 (%) | 15.75 | 11.79 | 7.73 | 6.50 | |

参考文献

- Andrews, F.M., & Withey, S.B., *Social indicators of well-being*. New York ; Plenum, 1978.
- 五味義夫 青年の生活感情と感動 (西平・久世編 青年心理学ハンドブック 福村出版、305 - 325) 1988 .
- Lu, L. & Shin, J.B., Sources of happiness : a qualitative approach, *The Journal of Social Psychology*, 137 (2), 181-187, 1997.
- Maslow, A.H., *Motivation and Personality* (3rd ed) Harper & Row, 1987.
- Ryff, C.D., Happiness is everything, or is it? Exploration of the meaning of psychological well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 1069-1081, 1989.
- 落合良行 青年期における孤独感を中心にした生活感情の関連構造 教育心理学研究、33、70 - 75、1985 .